寄島（よせじま）遺跡

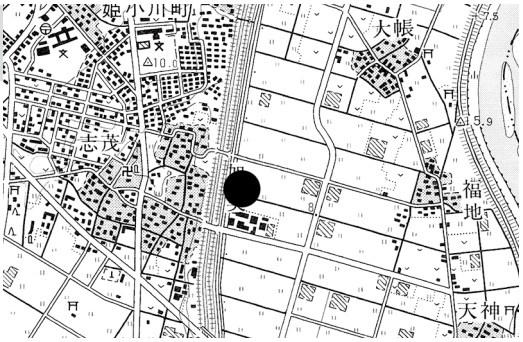
所　在　地　安城市小川町
（北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒）

調 査 理 由　交付金事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成23年５月～９月

調 査 面 積　2,135㎡

担　当　者　松田 訓・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は、鹿乗川改修工事にかかる事前調査として愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。当該遺跡は平成19年度にも発掘調査を実施しており、今年度はその南側から下懸遺跡までの2,135㎡が対象地となった。平成19年度の発掘調査では、古墳時代初頭を中心とする時期の集落遺構とその南側で方形周溝墓や古墳周溝と考えられる幅広の溝など遺構を検出しており、今回の調査でもそれらの検出が想定された。

立地と環境　遺跡は、碧海台地東縁下を南北に流れる鹿乗川流域の沖積地にあり、その東岸の自然堤防（標高約6.7m）に立地する。ただし鹿乗川の現流路は、江戸時代後半の村絵図に描かれている位置とほぼ同じであるが、それ以前の状況については不明な点が多い。実際に当センターの発掘調査では、平安時代後期までに埋没する流路が各遺跡で検出されており、それは現流路に対し大きく蛇行している。現在のところこれらが旧鹿乗川流路と考えられる。その後中世の流路は不明のままであるが、流路をはじめとする地形環境が一定ではなかったことが発掘調査によって判明しつつある。

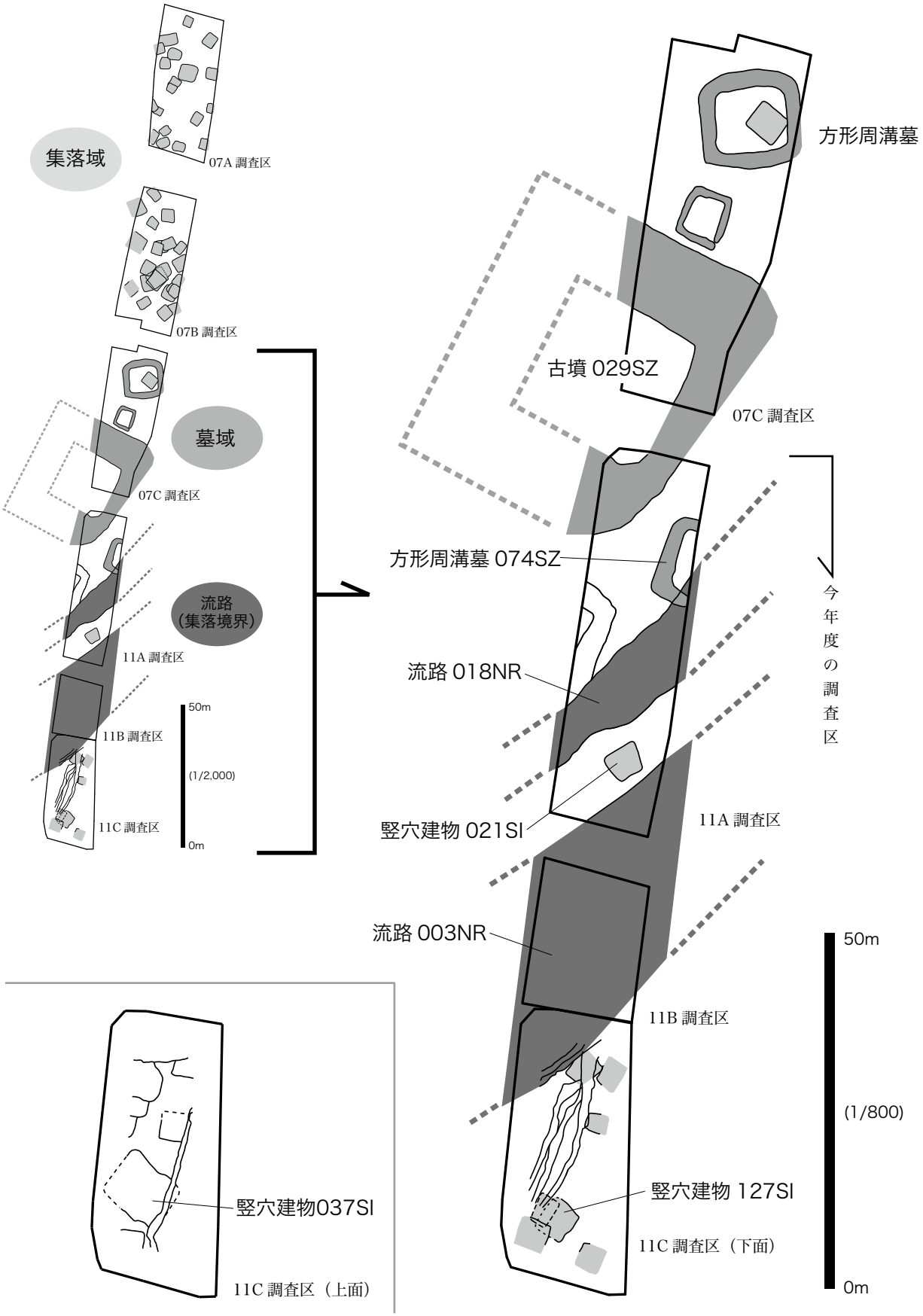
遺跡南側の下懸遺跡では弥生時代末期～古墳時代初頭に、同北側の姫下遺跡では古墳時代前期にそれぞれ最盛期となる集落遺跡が検出され、多数の土器・木製品が出土している。このことから、鹿乗川の旧流路沿いの自然堤防上に多数の集落が同時あるいは近接する時期に展開していたことがわかる。

調査の概要　調査区は北から11A～C区として設定した。それぞれで特徴的な遺構の検出状況となっており、調査区ごとに概要を示す。

11A 区　11A区は南北55mの調査区である。上記の幅広い溝の続きや、方形周溝墓1基、竪穴建物1棟、流路2条などが検出された。

方墳または前方後方墳　幅広の溝（029SZ）は撹乱を受けた部分が多かったが、その形状から方墳もしくは前方後方墳の周溝である可能性が高い。11A区では、墳丘の南東隅にあたる箇所が検出されており、先回の発掘調査（07C区）で検出された同北東隅までの長さは約40mである。これは方墳もしくは後方部の長さに相当する。溝の底面は概ね平らで、墳丘側の立ち上がりは非常に明瞭であった。その後長らく凹地になっていたとみられ、上層（黒褐色水成堆積層）からは山茶碗が出土している。しかしながら周溝掘削時に関わる遺物は寡少であり、その時期を特定するには至っていない。ただ、その南東側に位置する方形周溝墓を避けるようにして立地している点を踏まえると、墓域の中でも比較的最終段階に築造されたものと考えられる。

方形周溝墓　029SZの南東側に接するようにして方形周溝墓074SZが検出された。2カ所の隅部があり、一辺８m規模になると考えられる。周溝の深さは約80cmで、周溝からはほとんど遺物が出土しなかったが、重複して竪穴建物が検出されており、それより後になることが判明



寄島遺跡　平成 23 年度発掘調査の概要

している。

竪穴建物　調査区南部では竪穴建物021SIが、流路2条の間にある細長い自然堤防上で検出された。一辺が4.5mの正方形で壁溝と4本の柱穴を伴っている。ただし炉などの火処は検出されなかった。遺物も寡少で時期の特定はできていないが、概ね古墳時代前期以前と考えられる。

流路　調査区南端では、自然流路が機能低下し沼地状の堆積となった箇所が検出され、流路跡と認識した（001NR）。当該調査区内では顕著な出土遺物はみられなかった。またこの流路から自然堤防を挟んで北側13mの地点では、後背湿地の堆積が検出されこれも流路跡とした（018NR）。018NRでは併行する小溝群が検出され、湿地での耕作が行われていたものと考えられる。

11B区　11B区では調査区の大半を、11A区南端から続く自然流路の湿地状堆積が占めている。その幅は約22mで、下懸遺跡・惣作遺跡で検出された同様の遺構より規模は小さい。このことからこの流路は旧鹿乗川流路の本流ではなく、それに合流する支流であったと考えられる。

流路南岸付近ではその南側の自然堤防上に立地した集落から土器や木製品などが多数廃棄されており、それらが累積した状態で出土している。

土器は尾張地域の廻間1式後半段階を中心としており、高杯・壺・甕などがある。中には北陸地域に由来する口縁をもつ甕も出土している。このような土器組成や時期、他地域に系譜のある土器を含む点などは下懸遺跡出土土器の特徴そのものである。したがって当該遺構は下懸遺跡の一部として評価されるべきものといえよう。

木製の品も下懸遺跡の特徴と同様である。掘立柱建物などの建築部材が主体を占め、屋根の垂木とみられる材や梯子が数本出土したことなどが特筆される。しかしながらこれまでの下懸遺跡の調査ではわずかな掘立柱建物しか検出されておらず、さらなる高地での存在が期待される。

11C区　11C区は、自然堤防の頂部にあたり、特に調査区東側にむかってさらに高位傾向にある。そのため近世段階にはかなり削平を受けていたとみられ、竪穴建物などは調査区西半部で検出されている。

平安時代の集落　上位遺構面で検出された大小の竪穴建物は７棟ある。中でも037SIは一辺7.5mの規模でひと際大きい。しかしながらいずれも削平によって床面以下が残存するにとどまっている。その掘り方内からはK-90号窯期の灰釉陶器が出土していることから、平安時代中～後期のものと考えられる。これらの竪穴建物跡を切り込む遺構からは山茶碗とその上位包含層から戦国時代の土師器鍋が出土しており、中世以降も集落であった可能性が高い。鹿乗川流域の沖積地上ではそれほど多くの中世集落は確認されていないため注目される。また、竪穴建物に先行する奈良時代の遺物として桶巻き作りの丸・平瓦片が多数出土しており、遺構は検出されていないが瓦葺き建物が存在した可能性が考えられる。

弥生時代の集落　下位遺構面も削平により遺構の残存はわずかではあったが竪穴建物４棟やそれに先行する小溝群を検出した。竪穴建物の時期は出土遺物が少ないため特定しにくいが、北側の流路に廃棄された土器の時期に比定されると考えられる。最も先行する127SIは一辺4.8m規模で炉は伴なっていない。　（永井邦仁）

寄島遺跡　11B 区流路全景（南から）

寄島遺跡　11B 区流路の建築部材出土状況